

識別番号 P 1 6  
研究課題 ナショナリズム復興のなかの文化遺産－アジア・アフリカのアイデンティティ再構築の比較－  
研究代表者 私市正年（アジア文化研究所）  
共同研究者 赤堀雅幸、シジル・ヴェリヤト、川島緑、小牧昌平、寺田勇文、根本敬、福武慎太郎、丸井雅子（以上、アジア文化研究所）

Summary This research project was begun with the aim of clarifying the following two issues: namely, ‘in what way have the monuments of cultural heritage been utilized within the nations of the world as trademarks of nationalism or links to patriotic education,’ and ‘what are the characteristic features and problems involved in the conservation of cultural heritage, with regard to recreating a nation’s identity.’

The project led us to the following conclusions: the significance of a cultural heritage or archeological artifact is not something confined to the past. Rather, it is suffused with profound political significance. Also, since the 1990’s, in the nations of Asia, the Middle East and Africa the concept of nationalism has witnessed a vigorous revival, with local communities strengthening their individual identities as a defense against globalization. This is the first step in our study, and the process is likely to extend over several years.

## 1. 研究の背景

本報告は、2009－2010年度の2年間にわたって日本私立学校振興・共済事業団（学術研究振興資金）から助成を受け実施した共同研究プロジェクトの研究成果である。

19世紀後半から20世紀前半までの「近代」に形成されたナショナリズムは、その後弱体化、ないしは消滅すると言われてきた。ところが1990年代以降、とりわけ冷戦終結以降、そうした見方に反する状況が世界各地で起こり、そのうねりは「ナショナリズムの時代」と呼べるほどの勢いをもって国家の根幹を揺さぶった。こうしたナショナリズムの復興は、グローバル化に伴うアイデンティティの危機が関係していると考えられる。グローバル化は自由主義体制と市場経済からなる世界的な安定的状態をもたらすものとして、肯定的にとらえる見方もあったが、かえって経済格差が広がり、平等な社会が後退したのではないかという批判も高まっている。また、グローバル化の進展は米国に代表される特定の文化や価値を世界に押し付け、多様化ではなく画一化した世界をもたらすのではないかという懸念も見られるようになった。

このような批判や懸念は、グローバル化によって「想定された」コスモポリタンな価値観の成立ではなく、むしろ人々が画一化や均質化を自らのアイデンティティの危機として認識したことを意味し、それがナショナリズムへの回帰を促したといえる。

## 2. 研究の目的と特徴

[目的] ①経済のグローバル化が議論されるようになった1990年代以降、文化遺産が各国のナショナリズムの表象や愛国教育の一環としてどのように利用されているのか、②文化遺産の保護の在り方が各国のアイデンティティ再構築との関連においてどのような特徴

と問題点を有しているのか

〔特徴〕 これまで本研究所が主体となって進めてきたアンコール（カンボジア）を中心とした文化遺産に関わる調査と研究をモデルとしつつも論点を絞り込み、比較の視点を導入して地域をカンボジア一国からアジア・アフリカの複数の国々に広げ展開した。研究分担者の専門分野を活かし、方法論としては考古学、歴史、宗教、人類学、政治学等を採用し、現地調査および一次史料調査に基づいた本研究所ならではの共同研究が特徴である。

### 3. 研究活動

研究会、講演会等を計 7 回実施し、2 年目の 11 月には本研究プロジェクトの成果を総括する目的をもって国際シンポジウムが開催された（2010 年 11 月 21 日開催、於上智大学）。このシンポジウムでは、先に挙げた二つの研究目的について、具体的な事例がアジア、中東、アフリカの諸地域から紹介、議論された。

### 4. 成果と課題：国際シンポジウムの総合討論を踏まえて

この共同研究は、どこまで研究対象としての文化遺産の特質を、研究分担者同士が共有していたかどうか。文化遺産は直接的に破壊されるだけでなく、政治や社会の変化の過程で、目に見えない形で破壊される。軽視、無視、否定（破壊の実態が隠される場合もある）など、問題の本質を理解するのが困難な特徴を備えている。文化遺産とナショナリズム復興との関連およびアイデンティティ再構築の理解は必ずしも研究者間で共有されていない。各地域の文化遺産を巡る保存政策・活用の現状に関わる事例について調査を実施しても、議論がかみあわない点もみられた。また、調査地域が紛争や対立のため、調査の実施が難しい場合もあった。しかし、2010 年 11 月に実施した国際シンポジウムでは、むしろ紛争や対立が文化遺産研究の政治的側面を浮き彫りにし、本研究の今後の重要性と発展の可能性を明らかにしたといえる。

グローバル化の進展は、文化遺産に重大な影響をもたらした。文化遺産という視点からみた場合、グローバル化は相当に難しい問題を内包している。グローバル化によって成立する世界は、ある種の「想像の共同体」であって、そこにある文化は、根なし草の文化、「デラシネ *déraciné* の文化」、いわば「仮想 *virtual* の文化」であるのに対し、人々が実際に生活しているのは「地域社会」であり、人々の生活と結びつき、土地に根付いた「文化」はそこに存在する。「仮想の文化遺産」と言う点からみれば、地域社会の文化は意味がなくなる。バーミヤンの遺跡の破壊は当然、正当化される。

このように、文化遺産や考古学的遺跡の価値はそこでは単なる過去の文化に限定されず、政治的な意味をももっている。さらにアジアや中東・アフリカ地域では、グローバル化に反発するかのように、ナショナリズムの復興やローカル社会の自立意識が強まっている。本研究はその第一歩の研究であり、今後、継続的な研究が必要である、と考えている。

### 5. 出版物

なお、本共同研究の成果は次の報告書に詳細がまとめられており、アジア文化研究所ウェブサイトからも閲覧が可能である。<http://www.info.sophia.ac.jp/iac/publish/other.html>  
上智大学アジア文化研究所『ナショナリズム復興のなかの文化遺産－アジア・アフリカのアイデンティティ再構築の比較』2011 年 3 月。